
星は魔法の世界で何を見る

黒い狐と紅い眼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星は魔法の世界で何を見る

【Nコード】

N4430X

【作者名】

黒い狐と紅い眼

【あらすじ】

どうも初めましてカラオケで歌ってたらし小説書きたくなった黒い狐と紅い眼です。

ただ衝動に任せて書きはじめたので、設定が決まっていらない、更新が月一であるかないか、作者初心者、処女作、の四重苦!？ですがそれでもいい、見てやろうじゃないかという人は見てください。

ただの高校生、語井望はある日の夜、星が自分に落ちてくる夢を見

た。次に目覚めると白い空間で：その後神様来たり神様？になったりネギまに転生したり何千年と監禁されたりと望の明日はどっちだ！？

第一話 星がはいってきた（前書き）

初めまして、黒い狐と紅い眼です。処女作で駄文ですがよろしくお願ひします。

第一話 星がはいってきてた

さて、皆さん唐突ですが質問です。変な夢見て起きたら白い空間でした。へ？何をいつてるのか解らない？じゃあ回想をどうぞ。

俺こと語井望はバイトも終わって家に帰りやることもなく寝たのだ
が…

「うん？ここは何処だ？」

気づいたらほとんど何もないだっ広い場所にいた。例えるなら B
LEACH にでてくる修行部屋見たいな？

「あれ？なんか暗くなって来てる？そういえば此処って空は…ある
…の……」

あれ？何だか？大きな？星が？落ちて？くる？よ？

「ッ！？逃げないと！！でも何処へ！？あ！？近い！！近い近い！
！もうそこまで来てる！！あっ！？」

あゝもう終わりだ……ってあれ！？俺寝てたからこれ夢じゃね！？
………来た………！！これで勝つ……！！

「夢だとわかればこっちのもんだ!! 受け止めやらあっ!! やっぱムリッ!! あっ来ないであっア~~~~!!」
ピチューン☆

「ッ!?!、ピチュッて、たまるか~~~~!!!!」

そう言って星を受け止める。気分はまさに元気玉を受け止める魔人ブウだなんてあれ? 何だか身体に星がはいってきてるような? って「うわっ!! はいってきてる!!? はいってきてるよこれ!! どうすんだよ!?! うわっ!! キモい!! あっ」意識が……

そんなこんなで気づいたらこの白い空間に………どうしてこうなったorz

第二話 星になって生まれて目があって!?(前書き)

予想外に速く出来たので投稿してもらいました。それでは「星は魔法の世界で何を見る」お楽しみ下さい

第二話 星になって生まれて目があって!?

さて、前回気づいたら白い空間にいた俺は色々探したんだが何も見
つかりませんでした。

あれ? 作文? まあいいや、それにしても何もないな。あるのは、白
い地面、白い空、白い服着たおっさん、白い空間、……ん? 何か
変なのがあったような? よし、もう一回、白い地面、白い空、白い
服着て興味深そうに見てるおっさん、白い空間、……ん!
? おっさん!? なんでおっさんがいの!? まあいいやとりあえず、

「おっさん、「おっさん!」?」ん? いいじゃないかおっさん、で何
か用か? 用がなくてもいいから話そうぜ!

だってこの空間に来てから初めまして会った人間だぜ!! さあ話せ
!! すぐ話せ!! そして俺にも喋らせろ!!

「色々と振り切れとるの(汗) まあ良いわいただ儂はどちらかと言
わんでもいいさんじゃないかの?」

まあ確かに何処からどう見てもいいさんだけど

「ノリで?」「ノリなのかの!」おうノリだ、まあいいや、それで
じいさんはなんで俺を興味深そうに見てたんだ?

「うむ、儂らが作った星を何故か取り込めたおぬしのことが気にな
っての」

へ? 星って夢のこと? 作った?

「何言ってんだよじいさん”パーン”へ?」

「それは儂を殺してそのままショックで気を失ったのじゃ」

ん？じいさんを殺した？…ッ！！！そうだ！俺が肩を叩いたらって！！

「じいさん！！」

「ハロー（＾ー＾）」

振り向いた先にはなんともなかったかのようにたたずむじいさんの姿だった…ええい！！誰か説明しろ！！！！

「んで？じいさんは何者なんだ？」

「儂か？儂は神じゃ」

へ？神？髪じゃなくて？

「その髪じゃないわい、神じゃ」

「うわゝ心を読みやがった。で、その神様が俺になんのようにだ？」

「ふゝやつと話ができるのじゃな、して！それなのじゃがおぬしは夢で落ちてくる星を吸収したの？」

ん？落ちてきた星？

「それなら確かに身体にはいつてきたがそれがどうかしたか？てか、身体は大丈夫なのか？」

「うむ、儂どころかこの空間自体消滅しようとしていたのじゃが儂がおさえておいたわい、ただおさえるのに気をとられて儂死にかけたがの（汗）それよりも吸収したかのゝまずいのゝ」

へ？何がまずいんだ？

「いやの、あの星を吸収したから星Ⅱおぬしになってしまったのじゃ」

「考えてることにたいしての返答ありがと、って！俺Ⅱ星！？どういうことだよそれ！！」

てか、この空間が消滅しかけたって…

「ふむ、最初から説明したほうがよいの、少しながくなるがじつはあの星は儂が作ったのじゃが「ええ！あの星をじいさんが作った！！」これ！話の腰を折るでない、まあ聞きなさい、それでさっきも行ったとおり儂は神じゃがこの空間にいささか飽きての、儂が住めるような星を新たに創ることにしたのじゃが…少々やり過ぎてしまったの、儂でも傷一つつけることができなくなったのじゃ（汗）そうしてその星をどうにかせねばいかなという時に…」

どうしたんだ？

「怒らんで聞いとくれよ…じつはな、その創った星をの…落としてしまったのじゃ…」

へ？何処に？

「おぬしに…」

……………俺？

「そうじゃ、その事に関しては謝罪する、済まなかった。だがの、おぬしが死んだらすぐに蘇生して色々特典をつけて人生を色好い人生を送れるようにするつもりじゃったじゃが！おぬしは星を吸収し同化してしまったのじゃ！普通では到底あり得ぬことなのじゃがそれがおこったのじゃ！！わかるかの！神の中でも一番力の強い儂でも傷一つつけれんおぬしは今や存在するものの中で最強の強さを手に入れてしまったのじゃ！！！」

なん…だと…

「なあじいさん……………あんた、最高神なのか？」

「引っ掛かるのそこ！？」

「冗談だよ冗談、それでじいさん、“存在最強”（笑）になった俺はどうすればいい？」

「それなのじゃがおぬしには転生してもらおう、もとの世界は済まないがもうムリじゃから転生先はネギま！？じゃよ」
意味がわからないよ…

「どうやって行くんだよ」「そこなのか！？」嘘だよ、行くにはいいんだがこのままだと原作崩壊どころか世界崩壊するぞ」

いやマジで、

「そこは儂がおぬしを強化するから心配はいらん、破壊はできぬが強化はできるでの、とりあえず容姿を決めたいのじゃがどんなのがよいかの？」

「じゃあ最強繋がりで戯言シリーズの“人類最強の請負人” 哀川潤の男性バージョンであと星になったということとどこかで見たアルテミットワンになれるようにできるか？」

「アルテミットワン？…ああ、これじゃな、して、どんな容姿が良いのじゃ？」

「ファンシスのビーストで色は暴走状態の黒で頼むわ」

「あいわかった、あとリミッターと他に要望はあるかの？」

「じゃありミッターの方は人類最強を基準にして他の追加は…そうだな、じゃあ戯言シリーズの能力全部と刀語の見稽古と悪刀の時の七実が覚えている技で」

「さすがに多くないかの（汗）」

「リミッターも兼ねてるからいいんじゃないか？七実なんて先輩みたいなものだし」

「そういうことならいいじゃろう、もうないならネギま！？に送るぞ」

「あ！ラストに俺の家族に幸運EXってできるか？」

「おぬし面白いのゝあいわかったそれでは送るぞ」

「ああ、送ってくれ」

そう俺がいうと俺の意識はとんだ：

よお、転生した語井望だが早速問題が発生した：

「貴様、何者だ」

目の前にライフメーカーさんがいてがつつり目があってるんですけどゝ！！！！？？

第三話 星と監禁と実験と覚悟を（前書き）

書いてたのが消えたりなんか二回同じものを書いてたりといろいろあつてやつと投稿、

今回はキャラ崩壊や鬱描写があります、気をつけて下さい。誤字、脱字、があると思いますが全然指摘してくださっていいのでお願いします。

それでは「星と監禁と実験と覚悟を」をお楽しみに下さい

第三話 星と監禁と実験と覚悟を

えゝ前回転生した望ですが

「貴様は何者だと聞いている」

何でライフメーカーさんがいるの！？なぜだ！？神よお助け下さい

（「、旦那」ノ～～

“答えてしんぜよう”

だ、誰だ！って神様しかいませんね

“うむ神じゃ、そして何故ライフメーカーがおぬしの前にいるかというと”

いうと？

“おぬしは魔法世界に生まれたのじゃが知ってのとうり魔法世界の住人はライフメーカーが創った、いわば偽物じゃ、じゃがおぬしは星を吸収したので本物として生まれたのじゃ、じゃからライフメーカーはおぬしを危険と判断しておぬしの前に現れたのじゃ”

マジかよ…つくか赤ん坊に話しかけるライフメーカーって…シユールだな…

“そうじゃった、おぬしは不老不死で肉体年齢をかえられるようにしといたからの、では頑張つてのゝ”

おいしい！！！？？放置っすか！！！？？神カムバツ~~~~ク！！！！

無理かゝ仕方がない、えゝと二十歳ぐらいでつと、あれ？大きくなつたら今裸だから……

「うわゝゝゝ！！！？？」

望side out

ライフメーカーside

（これよりこういう時は創造主とします。）

なんなのだこいつは、それが創造主こと我がこやつにいただいた最初の印象だった

まったく、この世界を救える（消せる）者が産まれたと思い来てみたが、

「うわゝゝゝ！！見るなゝゝゝ！！！」

いきなり大きくなったと思ったら叫び出すとは…このようなやつから我を越える存在感を感じるとは、我も老いたのだが裸ならば丁度よい、そう思い我はこやつの服を拘束服として دادしたが…なんとも簡単だったなさて、このようなやつはそうそうに殺してしまうか、と思っていたがすぐにその考えをあらためる何故なら

「お？服でた、でもc，c，？、出夢？まあいっか、せいの！」

そう言って我の創った拘束服をいとも簡単に破ってしまった、我と

したことが見過ごすところだったが、
こやつ、ちと厄介だな、ならば！

「貴様、何故成長したかは知らんが好都合だ、貴様はこのままここに監禁し実験させてもらう」

創造主 side out

望 side

「貴様、何故成長したかは知らんが好都合だ、貴様はこのままここに監禁し実験させてもらう」

なにかを考えていた創造主がいきなりそんなことを言い出した。

は？何故？何のために？

「ちなみに拒否権はない、拒否した場合の人質もいるのでな」

「ッ！！？おい！創造主！どうゆうことだ！人質ってなんだよ！！！」

「ふん、貴様の姉であり、オスティア王家の姫、“アリカ・アナルキア・エンテオフウシア”だ」

……………へ？

「俺の姉がアリカ姫？てことは俺は？」

「貴様はオスティア王家が王子、“アレン・メルゼズ・エンテオフ
ユシア”だ。」

.....は？アレン・メルゼズ・エンテ
オフユシア？てかメルゼズって暴王？俺って暴王なの？って！！！！

「アリカ姫が人質ってのはどうゆうことだよ！！」

「簡単なことだ、貴様が拒否した場合彼女が監禁され実験されるだ
けのことだ」なっ！！！！？？

「さて、どうするのだ？まあ、決まっているようだがな」

「ああ、俺はお前の実験に協力する」

そうだ、俺に姉がいるというのなら俺は俺の家族を護るだけだ。あ、
親はべつね、あいつら完全なる世界の一派だから

ただ、俺の“身内”に手を出すやつは……滅すだけだ

「さて、実験にあたってまず身体を調べさせてもらうため、貴様を解剖させてもらう」

「くそ！最初からヘビーだな」

あれ？でも俺の身体はあのじいさんでも傷ひとつつけられなかったんじゃない？

「では、あとを任せた」

そんなことを考えていたら創造主は回りにいた研究者らしき人達に任せて消えたてか、先頭の研究者らしき人はマッドの星のもとに生まれたのだろうか？

「クククッ、興味深いですねー一見普通の人間に見えるのですが」

訂正、この人は完璧にマッドでサイエンティーンな人だ

「まずは、身体の中身を見たいので服を脱いでこの手術台に寝てください」

服ってか拘束服なんだけどね、てか手術台はどこからでたんだ？

「てか、ここどこ？」

「ここは、研究や実験を想定して作った別荘ですよ、もちろん、普通とは違います！この別荘は！通常一時間を二十四時間に変えているところをさらに二十四時間くわるようにして合計で一時間を五七六時間に増やすことに成功したのです！！！！しかも！！時間軸は外の時間に設定することに成功したのですよ！！！！！！」

てことは、五七六時間が一時間ってことは、五七六時間×二十四時間だから……一日、一三八二四時間！！！？ヤバイヤバイヤバイ！！？ぶっちゃけ一日が五七六日だろ！！俺何年監禁されんの！！！！？？？？

「ああ、君は実験も兼ねて時間軸は中の時間軸と同じにしたからせいぜい生きて楽しませてくれたまえ、ヒヒッ♪」

♪うぜーそして不老不死だから変われねえー肉体年齢は変えられるけどその事を言うと

「クククッ、フハハフハハハハハ君は最高だよアレン君！！！！非常に愉快だよ！！！！これでこそあの御方についてきたかいがあったというものだよ！！！！さあ！！はやく手術台に乗りたまえ！！！！！！」

ここまでできたら素直に手術台にのるけど結局マッドの人以外の人達が一言も喋らねーそしてマッドの人の名前も解らねーとりあえず手術台にのってと、

「なあ、結局あんた誰？そんでまわりの人達は何なの？喋れないの？馬鹿なの？死ぬの？」

「クククッ馬鹿とはひどいですねーまあ名乗ってなかった私にも非はあるのでいいとしましょう。それでは改めて私はネオ・アルカディア以後お見知りおきください、そしてまわりの者共は私が教育したものだので喋れないのですよアレン王子♪…ヒヒッ♪」

何か人間達の楽園という名の箱庭についてそーな名前だなくそれで

やっぱりこいつサイテーだわ：そんで愉快犯だわ：まわりの人達：ドンマイ、てか人が非人道的なことされてんのになにも感じね～ってことは俺もどこか壊れてきてるからか？まあ、それよりも服脱いでっど、

「ほんじゃあさっさとはじめてくれ」

「その潔さ、いゝですね～えゾクゾクします。それでは失礼して、ん？おい三七番！！解剖道具を持ってこい！！失礼しました、それでは実験を開始します。麻酔はありませんよ、ヒヒッ♪」

「麻酔ないのかよ！！！？まあいいけどよくそれよりその三七番ってなんだよ？俺にも何かつける気か？」

「ええ、この番号は私が教育した順番みたいなものです。アレン様にももちろんあります。聞きますか？」

「ああ」

「それでは、アレン様は特別な検体なのでいままでの奴らとはわけのために“零番”とでもしましょうか」

「あゝもうそれでいいよ、さっさとはじめてくれ」

「ええ、それでは実験をはじめます、ヒヒッ♪」

「何!?!?!?メスが体に入らない!?!?!?」

「高圧水流でもだめか!?!?!?ならば!?!?!?」

「バカな!?!?!?!?!?ダイヤですらなんの抵抗もなく切れるこのナイフが!?!?!?!?!?」

「そうです、ヒヒッ♪何でいままで気づかなかったのでしょうか、アレン様いえ、零番、自分で自分の体をさばきなさい」

「これで、身体の中身は大体わかりました、なかなか興味深かったですよ、しかし、もう傷がないとは瞬間回復というやつですか興味深いですね、ヒヒッ♪」

「……………」

「おや、返事がありませんね、まあいいですか、それでは一番！こっちへこい！！！」

「零番、いまから一番と殺しあってもらいます。せいぜい頑張ってください♪」

誰かが何かを言ってる……………

「はじめまして、零番、一番です。それでは実験番号一番、実験を

開始します。」

誰かが何かをはじめらしい……でもわからない……

「くっ！体が堅すぎる！！」

誰かが俺に攻撃してきている……殺さなきゃ……

でもダメ……人は殺したらダメ……

でも殺さなきゃ姉さんが……殺さなきゃ……

姉さんのために……守らなきゃ……

姉さんを……決め

なきや……………人を殺す覚悟を……………

.....でも.....

人を殺す理由を……

姉さんにしたらダメ……………

だから……姉さん

のためじゃなく……

自分のために……………

.....人を.....

殺す

.....キヤ

[illegible]

[illegible]

気づいたら俺の髪と眼は黒く染まり……一番の人は二八の肉塊にな
っていた……。それでも後悔はしない……。自分で決めたこと
だから……。それでは……

……………“零崎”始め
るとしよう。

第四話 星、時がたち、出会いと事実、そして…（前書き）

はい、黒い狐と紅い眼です。急展開！！そして今回ころころS i
d eが変わります。それでは皆、『星は魔法の世界で何を見る』
お楽しみに下さい。

第四話 星、時がたち、出会いと事実、そして…

どうも、望改めアレンですと言いたいですがあえて零番です。前回零崎になっちゃった俺ですが………何か…戻れました………へ？何に戻れたかって？え〜とですね、理由はあるんだ。俺さあ〜すね。もとの人に戻れました。いやね、理由はあるんだ。俺さあ〜見稽古持ってたじゃん、そのせいか自分見てたらね、オンオフがね、出来るようになったの。あと零崎姓は“零崎星識”^{ぜろざきせいしき}と名乗ってます………そんなまずすぎたかな？まあいいけどよそれで俺がここに来てから大体く〜と外の時間で大体十年たってるから〜一日が五七六日でかける三六五日にける十だから五七六×三六五×十だから二百十万二千四百日で閏年が二回あったから一一五二日たして合計二百十万三千五百五十二日だから五千七百六十三年とちよつとがたった。それでもうそろそろ十歳の誕生日♪まあ、祝うことでもないんですがねだって俺の実年齢は五千七百六十三歳ですからね軽くあの不死の小猫ちゃん越えたからね。あとこんだけ監禁やら実験やらしたせいで大体出来ることがわかりました。例えば“言葉の重み”あの王様キャラのは電気でしたけど俺のは創造主の鍵みたいなかんじだ俺が創造主より上の存在なら出来るかな〜と思って気合いいれて言ったら出来ました。この世界のどんなものでも言うことを強制的に聞かせそうです。………本当に厨二、ありがとうございました！もう俺の能力とかそんなのばっかだよ！すまない取り乱した。次は俺の魔力やら気やらだがまあ無限？だな何で？がついてるかを説明すると、俺ってさ〜星じゃんだからなのか魔力とか気の量好きに変えられるだよ〜うん、チートだね。まあそれ以外にもビーストになったら尻尾が十本だったり身体の大きさを自由に換えれたり身体の大きさが最大で月とあんまりかわらなかったりまあ、チートだね。それで長々と話したがもう実験の時間になったから行かなくてはいや、逝かなくてはい、てことでアデュー♪

アレン side out

??? side

突然じゃが私の弟と妹の話をしよう。まず私の妹は今会うことができないのじゃ。何故かと言うと私の妹は『完全魔法無効化』^{マジックキャンセル}という能力を持っていて今は外国からの保護という名目で監禁されておるからじゃ、私もどうにかしたいと思っておるのじゃが国のことを思うと強く言えんのじゃ、だがいつかは“アスナ”を救い出す。これは絶対じゃ!!、次に私の弟の話じゃが、私の弟はもうこの世にはいないのじゃ。いや、いないと言うのはすこし違うな、私の弟は産まれた時にはもう死んでいたらしいのじゃ、何故らしいと言ったかというとは私は弟が死んだということは聞いてはいたのじゃがその頃は幼かったゆえ弟の顔を一度も見ることが叶わなかったのじゃ。だからせめて墓参りぐらいは行きたかったのじゃが何故か皆に止められ理由を聞いてもはぐらかされるだけじゃ、しかし今日は何故かは知らんがあまり人がいないのじゃ、だから今日こそは弟の墓参りに行くのじゃ!!

これは…なんじゃ?…墓があると聞いていた場所についたはいいが転移魔方陣があるだけではないか、………
……まさかこの中に私の弟の墓があるのじゃろうか?とりあえず入ってみるかの

“フォン”

ん?着いたか?って!どこなのじゃこは!?!どうなっておる!私の弟、“アレン”の墓はどこにあるのじゃ!?!ん?あそこに誰かおるの、………ッ!?!?!まずいぞあの“黒髪”の男、龍種と戦っておる!!今すぐ止めなくては!!

「なっ!?!?!」

だが、その心配も杞憂におわる、何故ならその男は最強種とも呼ばれる龍種を一発のパンチで殺してしまったのだから。

??? side out

アレン side

龍種を殺したと思ったらなんか女の人が見てる、新しい実験の監視の人かな？とりあえず。零崎から戻って

「すみませ〜ん、貴女は誰ですか？〜新しい監視の人てですか？〜」

あれ？なんか驚いている？

「お」

「お？」

「お主は何者じゃ！龍種を一発で殺したり、監視とか意味が解らぬわ！！」

あれ？監視の人じゃない？それにこの口調…まさか！

「すみません、貴女は誰ですか？」

「そんなことより！おn「お願いします。貴女の名前を教えてください。」私のことを知らない！？まあよい、私は“アリカ・アナルキア・エンテオフュシア”じゃ」

やっぱり、この人は…俺の……

アレンside out

アリカside

なんじゃ！こやつは！？私のことを知らないと言い、私の名前を聞くといきなり黙りよって！って、ぬお！！！？？なんじゃ！？今度はいきなり泣き出しよった！！！？何かしたかの！？

「あゝお主、何で泣いておるのじゃ？」

「あ！い、いえ、何でもないです。そう言えばまだ名乗ってなかったですね。俺は零番、しがない実験体です。」

ん？零番？

「零番というのはどういう意味じゃ？」

「ああ、零番というのは俺の実験ナンバー、本当の名前はあるのですがお教えることはできませんのもう一つの名前で名乗らしていただきます。」

そう言って、髪と眼を先に見た黒色にかえ、こやつは言った。

「“零崎星識”と言います。以後、お見知り置きを」
これが、こやつ、零崎星識との最初の会話になったのじゃ。

アリス side out

アレン side

アリカ姉さんが最初に来てからもう五千七百六十日たった。姉さんにしたらず十日なだけだな……まあそれはさておき、結局姉さんには俺が弟だということは伝えていない。知らなければ知らないでいいだろう。あと、アリカ姉さんはこの“別荘”からは簡単に出れたらしいです。そんな感じで今日をむかえ、今日はついに俺の十歳の誕生日です！……！！……！！……！！どうでもいい？それよりも話を進めろって？いやいや、そうなんだけど姉さんにアスナが監禁されてるって聞いたからな、ちょうどいいし今日、この長い、長～～～（～～～）い監禁生活から脱走しようと思っただけ。だから言えるうちに言っとかないかなーと思って、あと今日は監禁から解放される記念すべき日だからアリカ姉さんも呼んでいます。もうそろそろ来る頃になって来たな。

「うむ、星識よ、今日来てくれと言つとつたから来てやつたぞ」

お気づきですか皆さん！！？アリカ姉さんが俺の名前を呼んでいるんですよ！！最初に会った時にいろいろ話したら下の名前で呼んでくれるようになったんですよ！！こんなに嬉しいことはない！！！！！！！！！！

「おい、星識、何をしておる」

おっと感極まって少し意識が飛んでたようだ

「そうでしたねアリカ姫、今日来てもらったのは他でもありません。実は俺、今日が十歳の誕生日なんですよ」

あれ？ 反応がない？

「じゅ、」

「じゅ？」

「十歳~~~~~!!!!!!????????」

うわ!!! 突然叫びだしたって、

「そう言えばまだ言ってますでしたね。俺は肉体年齢を自由に
えれるんでこの姿でいるんですよ、アリカ姫」

「そ、そうじゃったのか、ということは今日呼んだのは私に星識の
誕生日を祝って欲しかったのかの？」

と、少しあくどい顔で聞いてくる。ならば俺は！

「はい、それもあります」

「そ、それもあるのかの！まあ、良い、して他のようはなんじゃ？」

「はい、その事何ですが、この前俺はここに監禁されているって言
いましたよね、それでいろいろありまして監禁生活にもうんざりし
てきたので逃げようと思います。つきましてはアリカ姫にも見届け
てほしいのです。俺がここにいる奴等を殺して消える所を」

「なぬ！脱走するのは良いことじゃが殺のかの！？」

「ええ、生かした所で何を仕出かすかわかりませんからね」

「うゝむ、わかった。しかと見届けよう」

「残りはあんただけだぜ、ネオ」

「ぐううう！まさか零番に皆が殺されるとは、貴様の心を折ったと思った私も甘かったですね」

「ふむ、こやつがお主を監禁し、実験までしよった畜生は」

「おや？貴女様はアリカ姫ではありませんか？いやゝ何とも皮肉なもんですね、死を間際にして王族二人に会えるんですから」

あ！まづい！

「さて！ネオ」どういうことじゃ「アリカ姫、落ち着いてください！」

「おや？どうやらアリカ姫はご存じないご様子、これはいい♪教えて差し上げますよアリカ姫♪今貴女の横にいる人は誰だと思えます？」

「零崎星識じゃろ？」

くそ！ネオをすぐにでも殺したいが姉さんが聞きたいのか邪魔をする！

「いいえ違います。そもそも零番には兄弟がいてね、その兄弟を守るために実験を受け入れていたのですからたいしたものです♪それですね、その兄弟の名前というのが「ネオ!言うな!!」いい言います♪その兄弟の名前、それは“アリカ・アナルキア・エンテオフュシア”そう、貴女ですよ、アリカ姫♪」

「な!どうということじゃ!!!??.?」

「それはご本人に聞けばよろしいかと思いますが?アリカ姫」

「……………星識、どうということじゃ」

隠しきれないか、だったら本当のことをいうか

「……………俺の本名、教えてなかったですよね」

「……………ああ」

「俺の本名、それは“アレン・メルゼズ・エンテオフュシア”貴女の“弟”ですよ。アリカ姉さん」

A l e n s i d e o u t

A r i k a s i d e

「俺の本名、それは“アレン・メルゼズ・エンテオフュシア” 貴女の“弟”ですよ。アリカ姉さん」

星識、いや、アレンからその事を聞いた瞬間、私の頭は真っ白になった。

星識が私の死んだ弟？なら今まで星識、いや、アレンが実験に耐えていたのは私に危険がおよばないため？わからない、何がどうなっておるのじゃ…

「ハハハハハ！！どうですかアリカ姫！！今までの貴女の生活は零番、いや、アレン王子が実験をされていたおかげで成り立っていたということがわかりましたか！？ハハハハハハ！！」

……悔しいが、そのとうりじゃ。アレンが今まで実験に耐えてきたから私は仮初めの幸せを手にいれてきたのじゃから………だがどうすればいい？アレンに何をして償えばいいのじゃ………

「もう喋るな、ネオ」

私が心の中で葛藤していると、ふいにそんな声が聞こえてきたのじゃ

「フフフ♪どうしてですか？アリカ姫も真実を知れて嬉しそうだ」
だから、“喋るな”！！！！！！………」

「今のは適当につけた名前だが、“言葉の重み”って言ってな、どんな物でも俺の言うことを強制的にきかせる物だ」

「！！！！！！………」

「そう言えば、お前はこれがどうゆうものか知らなかったな。最後に知れて良かっただろ？じゃあ、もう思い残すこともないな……………せれでは」

「“零崎”始めるとしよう」
そう言って、アレンはあやつ、ネオを殺した。

「全部終わったな」

アレンがネオを殺したあと、私達はあの空間から脱出し、今は夕暮れの輝きをあびながら、城の庭で話している。

「の、のうアレン？」

「ん？何ですか？アリカ姉さん？」

む、こやつ、

「何故まだ敬語なのだ！家族なのだから敬語は抜きじゃ！」

「い、いや、流石にダメですよアリカ姉さん、俺は存在しないものとされも「ダメじゃ！私が許さん！」…………は、わかり、いや、わ

かったよ姉さん」

「うむ、それでよいのじゃ、して、これからどうするのじゃ？この城で暮らすのかの？」

「いや、俺はこのまま消える。やりたいこともあるしな」

なっ！！消えるじゃと！！いや、それよりも、

「やりたいことって、なんじゃ？」

「ああ、俺はアスナを助けたいんだ。今まで俺だけが監禁されてい
ると思っていたが、俺以外にもアスナが監禁されているなら、俺は
アスナを助けた」

それは……私も考えていたことじゃ……だがそれは私も……
いや、アレンは私も助けたいのじゃったなそのため己の身体を犠牲
にしておる……私に返せるものなど何もない、ならば！

「ジンじゃ」

「へ？」

「何、姿をくりますなら新たな名前が必要じゃろ？確か向こうの世
界、ああ、魔法ではなく東洋の魔法が発達した所じゃぞ、そこで仁
義という言葉があつての、そこからつけたのじゃ、どうじゃ？いい
名前じゃろ」

うむ、この言葉の意味は忘れてしまったがとてもアレンにあってお
ったはずじゃ

「ハハ、確かにいい名前だ。じゃあ俺はこれからジンだ！、あ！そうだ。俺これから請負人やろうと思ってるんだけど何かやってほしいことあるか？」

請負人？なんじゃろうかそれは？

「請負人ってのは仕事をしてくれって言われてその仕事を気に入ればそれを請ける。まっ、しょせん憲兵だな」
なるほど、って今心を読んだ？

「そら請負人だからな、読心術ぐらいできて当然だ」

「そ、そうか、では一つ頼まれてくれんか？なおこれは依頼ではない。これは姉が弟に言うお願いじゃ」

「アレン、アスナを頼む」

「……………」

「こんなこと言える立場ではないことはわかっておる。じゃがそれでも私は、アレンに、弟に妹のことを頼みたいのじゃ。こんな言い方じゃと私のことんひどい女と思うかもしれないが、それでも！姉として、妹を頼む、アレン」

「……………まったく、そんな言い方しなくても」

「……………すまん」

「いや、嬉しいんだよアリカ姉さん。俺は人に頼られたりしたことがなかったから。」

「アレン……………」

お主……………」

「ジンだよ姉さん。俺は請負人のジンだ。まっ、しばらくは俺を監禁してたやつの中間の家とかの宝を盗もうと思ってるから王泥棒ジンとかよばれたりね♪」

アレンはそう言っただのしそうに笑う。まるでそれが何でもないように……………だから私は見守ろう。たとえアレンが世界から追われても、私だけはアレンの見方でいよう。そう、今、きめたのじゃ

「まっ、とりあえずわかったよ姉さん。その願い、確かに“頼まれた”」

「うむ、ありがとう。アレン」

「だからジンだつてば「アレンじゃ、世界でどう呼ばれようがお主はアレンじゃ、私の弟でアスナの兄の、な」……………ありがとう。アリカ姉」

うむ、それでよいのじゃ。

「それじゃあもうそろそろ行くね、アリカ姉」

「そうか……………」

「うん、じゃあアリカ姉」

「またね」

そう言ってアレンは消えた。

アリス side out

アレン side

アリス姉と別れてすぐ、しばらく音沙汰がなかった神から念話があった。

“久しぶりじゃの”

ああ、神様かなんだ？

“お主が少し強くなりすぎじゃと思っの、ペナルティーとして鑢七実の病魔を追加する事にしたのじゃ”

第五話 星、のちのバカ兄（義理）に出会う（前書き）

すみません。遅れました。そしてみじかいです。本当にすみません。

第五話 星、のちのバカ兄（義理）に出会う

はい、ジンです。いや、この名前も有名になりましたよ（笑）それに二つ名もつきました。そして何故か紅い人の二つ名もつきました。例えば“赤き征裁”他にも“死色の真紅”“疾風怒濤”“輝くものは星でも盗む”あと望んだ“王ドロボウジン”そして、“存在最強”“存在最強の請負人”ですね。あ！零崎としての二つ名もあったな、それでは“死線を体現するもの”あと零崎の時は狐面をかぶっているの“狐さん”とかですね。

あと、罪口商会で完成形変体刀、全部作りました。あとオリジナルで斬刀をベースに絶刀、薄刀、を混ぜて斬刀より良く切れ、絶刀よりも硬く曲がらず折れず、薄刀よりもお薄い、刀、さしずめ、“完全形変体刀 断刀『流』（だんとうながれ）”を作りました。限定奥義は音もなかった人が気付いた時には切れている技名前を『断刀台』です。

あと、請負業は一部の人にしか知られていないんだけどね、一番最近のはER2システムを作ったとか言ってた三人組におれの戦いを見せる感じの依頼だった。……………布石じゃないよね？てか“人類最強”は俺がベースという感じになっちゃったかも……。まあ、いっか。とにもかくにも今ある人と依頼の説明受けてます。

「対象は……この三人の男、それに……この少年だ」

「ふん……なんだガキじゃねえか」

この会話で大体わかりますね。はい、ジャック・ラカンの最初？回想シーンでの最初の場面です。

「子どもと思って油断していると痛い目を見るぞ。オスティア回復

作戦の失敗の主因もこいつらだ。すでに精鋭で組織された討伐隊も送ったが悉く返り討ちだよ。君が望むなら部下もつけよう。正規兵ではなく憲兵や賞金稼ぎになってしまおうが……」

「いらねーよ、一人で十分だぜ。任せときな。」

ところで……もう一人来るって言ってたが……何処にいるんだ？まさか怖じ気づきやがったか？まっ、そっちのほうがやりやすいぜ」

はい、ここで質問です。何故？俺がいるのに気づかれてないでしょう？まあ、空間制作ですがね

「ここにいますよ」

「「ッ！！！？？」」

「誰だ！！！」

「さて？誰だと思う？」

「請負人ジン、依頼の時にどこからともなく声が聞こえるというのは本当だったのか……」

「何！！！！？？あのジンだと！！！！？？」

あゝあ、ジャックで遊んでいると依頼主が喋っちゃったよ。

「姿を見せやがれ！！」

「いいよ」

そう言って俺は姿を見せる。

「「!?!?!?」」

「改めて、はじめまして、俺がジンだ。」

「てめえ、いつからそこにいた……」

「あゝ、依頼主がウォッカを飲んでた時から」

「最初からじゃねえか!!」

「そういうこと、そんなじゃあ行くか」

「あ、ああ」

さて、どうなることやら。

ジン side out

no side

「んっふっふ。こいつが旧世界の、日本の鍋料理ってやつか」

「じゃ、早速肉を〜♪」

「あっ」

「ナギ、おま…何、肉から先に入れてんだよ」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「ゼクトも、鍋料理をおかしくするな！！」

「いいじゃねえか、旨いもんから先でよ。ホレホレ」

「バツ、バカ、火のおる時間差というものがあってだな、まずは野菜を入れてって、あ！ちよっ！！」

「あゝうっせ、うっせゝぞえゝしゅん」

「フッフ、詠春。知っていますよ。日本では貴方のようなものを…」

「『鍋將軍』と、言い習わすそうですね。」

「なっ！！」

「つ、強そうじゃな、」

「ナベシヨウグン。強そうだな、よし！詠春、今日からお前は鍋將軍だ！」

「ああ、もう口出しせん、全て任す、好きにするがよい」

「んー、嬉しくないなー、（鍋奉行なんじゃ…）」

「おお、なんじゃこのソース、うまいぞ？」

「ホントだ、うめえ!？」

「これこそが、日本の誇るしょうゆだよ」

「それに、大根おろしですね」

「これがしょうゆかゝスゲエうめえ」

「ナギ、お前は日本来たときにスシ食ったろ」

「姫子ちゃんにもくわしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃん？ ああ、オスティアの姫御子のことじゃな」

「まあ、戦が終われば、彼女を自由にする機会もつかめるやも…です」

「その戦だが…やはりどうにも不自然に思えてならん」

「何が？」

「肉ばっかくうな、たつく、なにかもだよ、お前が言い出したんだろうが、鳥頭」

「ところで、姫子ちゃんについて、いろいろ聞きたいんだけど」

「「「「!?!?!?」」」」

no side end

ジンスide

「ところで、姫子ちゃんについて、いろいろ聞きたいんだけど」

「「「!?!?!?」」」

「だ、誰だ!」

「ん? 誰だ? 誰でもねえよ。それより姫子ちゃんについて聞かせろ」

さあ、アスナの情報をはけ

「誰がお前なんか」「あ、ちょっと待って」!?!?! 何だよ!?!」

「おい、ジャックくこいよ」

「何だよ。たっく、せっかく今から剣投げようと思ったのによ」

「悪いな」

アスナの話を聞いたらいてもたってもいられなかったんだよ。

「んで? 何で姫子ちゃんのことを聞いて来たんだ?」

「ナギ、敵かもわからない相手に不用意に話しかけるな」

何かバカが話しかけてるな

「敵だぞ、もちろんな」

そう言って笑ってやる。

「へ！敵なら容赦しねえ。くらえ！“千の雷”」

そう言って零距离で撃ってきたが：

「おいおい、お気に入りの服が汚れちゃったじゃねえか」
「よゆうで無傷だ。」

「「「「！！！！？？」」」」」

「おいジャック、何お前も驚いてんだよ。俺が誰かしってるだろ」

「あ、ああ、だがよう俺でもそこまで出鱈目じゃねえぞ、ジン」

「何！？ジンじゃと！！？」

「おやおや、不味いですね……」

何か勝手に盛り上がってる。とりあえず、

「おい、ナギ、ジャックと戦ってこい。あいつはこっちで最強と呼ばれてたからな」

「何！！おい！俺が最強の魔法使いだ！！勝負しろ！！」

「へ！いいぜ、かかってきな！」

よし、ナギ（バカ）はジャックに任せて。

「で、姫子ちゃん、もとい、アスナ姫のこと、教えてくれる？」

「その前に、一つ、聞いてもいいでしょうか？」

「何だ？」

「何故、何故アスナ姫のことを聞くのでしょうか？」

うわゝ一番喋りにくいところをいったゝ

「アルビレオ…そこ聞くか？」

「ええ、興味があります。」

「あゝまあ理由としては………約束したからな」

「約束？」

「ああ、約束だ………大事な………な、さて、お前らの質問には答えたんだ、だから、俺の質問にもこたえてもらうぜ」

「しかたありませんね。いいですよ。お話しします」

そのあと、ナギとジャックの戦いを見ながらアスナのことを聞いた。

「そんじゃあジャックも負けたみたいだし、俺も行くわ」

いろいろ聞けたしな。

「ええ、また、あなたの話はとても興味があります。フフフ」

あれ？何か目がおかしいような？それにさっきからアルビレオしか喋ってないような？まあ、いつか。

「じゃ、帰るわ。おら！ジャック！起きろ！！」

そう言って俺はジャックを蹴り倒す

「アブッ！やめろジン！あっ！ちよっ！まじやめて！ちよっ！やめろ！死ぬ~~~~~！！！！！！」

「そんじゃあな」

この後、ジャックと一緒にちよくちよく紅き翼と会って、いつのまにか紅き翼にはいっていました！イエーイε||ε||（ノ≧▽≦）ノこれから俺らの所属した紅き翼の伝説が始まるぜ！！！！

まあ、

“戯言なんだけどな”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4430x/>

星は魔法の世界で何を見る

2011年11月11日20時48分発行